

眞板雅文

Masafumi Maita

4-26 April, 2020



眞板雅文「遠い風景」

ロープ、紐、枝、他 294×23×23(cm) 1986年

(写真: 大須賀信一)



「風景 No.2」
和紙、木、紐、他 100×106×15(cm) 1986年
(写真：大須賀信一)

— 展覧会概要 —

- 展覧会名：眞板雅文展
- 会期：2020年4月4日(土)～4月26日(日)
- 開廊時間：12:00-18:30
- 休廊日：月火曜日
- オープニング・パーティー：4月4日(土) 18:00-20:00
* 本展開催にご尽力くださいました眞板充江さんを囲んで、ささやかなパーティーを行います。
- 会場：GALLERY CAPTION
〒500-8846 岐阜市玉姓町3-12 伊藤倉庫 2F tel 058-265-2336
<http://www.gallerycaption.info/>
- アクセス：JR岐阜駅「北口」、名鉄岐阜駅より徒歩5分
- お問い合わせ：担当/ 山口 (月火曜日、祝日をのぞく 12:00-18:30)
tel 058-265-2336 fax 058-265-5715 caption@mbe.nifty.com

ギャラリーキャプションでは「眞板雅文展」を開催いたします。

本展は、さまざまな素材を扱いながら、一貫した自然観を持ちつづけた彫刻家 眞板雅文(1944年-2009年)が、当廊において1986年と1990年に行った個展に出品した、植物をモチーフとした作品を中心として、眞板の80年代の仕事を捉え直そうとするものです。

1960年代より、写真、映像、立体作品を発表しはじめた眞板雅文は、2年間のフランス滞在を経て、1976年には世界最大の国際美術展である『第37回ヴェネチア・ビエンナーレ』に招待され、次いで1986年にも、若林奮とともに日本館にて展示を行うなど、国内外で高い評価を受けました。またギャラリーや美術館での展覧会のほか、80年代から90年代にかけて宇部(山口県)や美濃加茂(岐阜県)など、全国各地で開催された野外彫刻展にも精力的に参加し、パブリック・アートも国内に数多く設置されています。眞板が惜しくも急逝し10年が過ぎましたが、常に第一線にあった作家の仕事のなかでも近年、70年代に発表された、写真に黄色いテープを貼ったシリーズ『自然線・人口線』や、大判の写真パネルと、日用品や産業材料などの、イメージと物体とを組み合わせた『状況』のシリーズが、海外を中心に注目され、再評価の気運が高まっています。

その、写真をひとつのメディアとして作品に取り入れたシリーズの後、眞板は丹沢(神奈川)にアトリエを移したことを契機に、ロープや布を使用し、木の枝、根などの『植物』、また自然の『風景』をモチーフとした、アニミズム的とも評される作風へと移行します。一方で、偶然目にした橋梁の廃材(鉄屑)との出会いから生まれた『風の道』(須磨離宮公園、1984年)のような野外展示や、パブリック・アートを手がけるなど、制作の幅に広がりを見せます。公共空間に向けての作品設置の機会を得たこと、また眞板自身が『環境造形』と呼ぶ、四季の移ろいや自然な場をより意識した試みのなかで、スケールの大きな作品が制作され、『音・竹水の閑』(入善町下山芸術の森発電所美術館、1997年)など、竹や石、水が用いられるようになります。

こうして眞板の仕事を時系列に並べてみると、素材やスケールが変遷し、一見してそれらのつながりを捉えることは、難しくも思われます。そこで本展では、野外彫刻、パブリック・アートの研究で知られる藤井匡氏(東京造形大学准教授)が、「眞板雅文の作品を彫刻＝写真という観点から」はじめて見通してみせた新著『眞板雅文の彫刻＝写真』(阿部出版)を手がかりに、本展展示作品『遠い風景』(1986年)や『風景No.2』(1986年)のような、ロープや紐、枝などを用いて制作された80年代の作品を、藤井氏が示した「<つくる> ことと <歩く> ことの繋がり」から辿ります。

藤井氏もまた「基本的に、眞板の作品は明確化の困難なところがある」と前置きしたうえで、「そのことは、逆にいえば、彼の思考が世界を分節する方向にではなく、世界を結合する方向にあることを示しているといえる。」と述べ、その思考に「<歩く>」ことが、深く関わっていることを示唆しています。眞板は「常に旅人でありたい」と、自らの足で気の向くままに歩くことを好み、旅するようにアトリエを転々としながら、その場所、その空間、またその瞬間に、身体を通して向き合い、そこで起こることを見ようとしてきました。あるインタビュー(*1)での冒頭、聞き手の「今回の作品も“風景”というタイトルがありますね」という問いに、おもむろに「だからやっぱり身体なんだよね」と答えてみせた作家は、自然のなかで世界と出会い、観察し、そして自らも自然とともに在るのだという、身体的な実感を、何よりの拠りどころにしました。生まれてこのかた歩んできた道筋と記憶、日々のお会いのもとに集められた素材とを、内なる自分を介して、目の前の風景と結びつけ、自然そのものへと連ねていく。連綿と巻かれたロープや、何かを結びつけながら枝葉を広げるように張られた紐は、それ自体が眞板の記憶であり、旅の先々で自然との豊かな関係を結びながら歩きつづけた、作家の一筋の軌跡と言えるのかもしれませんが。

お忙しいこととは存じますが、会期中には是非ご高覧賜りますよう、ご案内申し上げます。

(*1)「美術手帖」【作家訪問】眞板雅文 | 還流する風景 (1985年1月号、美術出版社)



「樹々の精」
第42回ヴェネチア・ビエンナーレ
＜イタリア、1986年＞
(写真：安齋重男)



「DANCE OF TREES」
紙に鉛筆、コラージュ 70×56(cm) 1986年
(写真：大須賀信一)



展示風景 - 「シンビズム3 信州ミュージアム・ネットワークが選んだ作家たち」 (安曇野高橋節郎記念美術館 / 長野、2019年)

眞板雅文 | Maita Masafumi

1944年 中国北東部(旧満州・奉天)に生まれる

1971-1973年 エール・フランスおよびシェルター・ロック財団の奨学金によりフランスにて滞在、制作

2009年 逝去

【主な展覧会】

1966年 村松画廊（東京）

1971年 「第6回国際青年美術家展」（高輪美術館/ 東京）【大賞受賞】

1972年 「MAITA」（ギャラリー・ランベール/ パリ、フランス）

1974年 「第4回神戸須磨離宮公園現代彫刻展」（兵庫）

1976年 「第37回ヴェネチア・ビエンナーレ」（イタリア）

1977年 「第10回パリ・ビエンナーレ」（パリ市立近代美術館、フランス）

1980年 「第1回ハラ・アニュアル '80年代の展望」（原美術館/ 東京）

1983年 「風景との出会い」（宮城県美術館）

「現代美術における写真-1970年代の美術を中心として」（東京国立近代美術館、国立近代美術館京都分館へ巡回）

1986年 「第42回ヴェネチア・ビエンナーレ」日本館にて若林奮とともに参加出品（イタリア）

GALLERY CAPTION（岐阜）

1990年 「現代美術の流れ [日本]」（富山県立近代美術館）

GALLERY CAPTION（岐阜）

1994年 「写真と彫刻の対話-安斎重男 眞板雅文」（神奈川県立近代美術館）

1995年 「第2回フジサンケイ・ビエンナーレ現代彫刻展」（美ヶ原高原美術館/ 長野）

「第7回本郷新賞 受賞記念眞板雅文彫刻展」（札幌彫刻美術館）

1997年 「眞板雅文展-音・竹水の閑」（入善町下山芸術の森発電所美術館/ 富山）

1999年 「彫刻の森美術館-森に生きるかたち-」（箱根彫刻の森美術館/ 神奈川）

2000年 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2000」（松之山町、新潟）

2003年 「音・竹水の閑-大原美術館 眞板雅文」（大原美術館/ 岡山）

2004年 「刻-還流 眞板雅文展」（みのかも文化の森 美濃加茂市民ミュージアム/ 岐阜）

2006年 「光が彩なす交響楽 眞板雅文インスタレーション展」（岩手県立美術館）

2007年 「水の情景-モネ、大観から現代まで」（横浜美術館）

2011年 「1970年代へ写真と美術の転換期 - 複写 反対 投影 -」（ユミコチバアソシエイツ/ 東京）

2013年 「あめつちとの協奏」（横須賀美術館/ 神奈川）

2019年 「光/陰 眞板雅文」（シーラカンス 毛利武士郎記念館/ 富山）

「シンビズム3 信州ミュージアム・ネットワークが選んだ作家たち」（安曇野高橋節郎記念美術館/ 長野）

2020年 「Masafumi MAITA」（ギャラリー・クリストファー・ガイヤール/ パリ、フランス）＜企画協力:ユミコチバアソシエイツ＞

【パブリック・コレクション】

美ヶ原高原美術館（長野） 宇部市野外彫刻美術館（山口） カスヤの森現代美術館（神奈川） 神奈川県立近代美術館

富山県立近代美術館 札幌彫刻美術館 下山芸術の森発電所美術館（富山） 大原美術館（岡山）

とうや湖ぐるっと彫刻公園（北海道） 美濃加茂市民ミュージアム（岐阜） 横須賀市美術館（神奈川）

ヒューストン美術館（アメリカ） パリ市立近代美術館（フランス） トロア美術館（フランス） カンティエニ美術館（フランス）

ストラスブール美術館（フランス） サンタバーバラ美術館（マモラ、イタリア） ピノー・コレクション 他